

広島市立大学附属図書館報

知恵の樹

growing in OZUKA



祝



機関リポジトリ HARP 登録件数 1,000件突破記念

特別号！

HARP(広島県大学共同リポジトリ)は広島県内の公立大学等の教育研究成果を電子的に整理・蓄積し、インターネット上で公開するしくみです。2008年4月30日に正式公開し、2011年2月1日には本学の登録件数が1,000件を突破しました。これも先生方のご協力があったからこそです。ありがとうございます！

これを記念して、今回は HARP に関係の深いお三方にインタビューし、機関リポジトリに関して、学術情報の電子化にまつわる様々な質問にお答えいただきました。

インタビュー① 浅田学長

図書館担当(以下「図」):情報収集と言えばインターネットで検索という時代になってきましたが、ご自身の教育研究活動で電子化による変化など何かありましたら教えてください。

学長(以下「学」):私が学生の頃は印刷物での文献調査がすべてでした。今はまずインターネットで検索し、手掛かりがあればそれをどんどん辿っていくようになり、情報入手のスピードと量が昔とは大きく変わりました。ただ、インターネット上の情報は品質のばらつきが大きいので注意が必要です。目的の論文に辿り着くこともあれば、怪しげな解説に辿り着くこともある。安心して引用できるのは、やはり信頼できる学会や出版社の情報であったり、社会的評価を得ている雑誌であったり、ということになります。その信頼できる情報源の一つが機関リポジトリだと思います。今は、電子出版や電子ジャーナルが急速に普及しているので、機関リポジトリがそれらと共存し、相互補完的な役割を持つようになればと期待しています。著作権やコストの問題があるので、まだ発展途上だと思いますが、機関リポジトリが信頼性の高い安定したデータベースとして整備されれば、出版されていない貴重な資料を入手することができるので需要が高まると思います。

図:そうですね。まずは学術情報・研究活動の成果をどんな人も享受できるような環境をインターネット上に作ろうというところから、機関リポジトリは始まっていますけれど、それが機関でやることによってその信頼性を確かなものにしていくという面を持っています。あとはそれぞれの論文のリポジトリのページを見ていただくと、それが「出版社(publisher)版」なのかそうでない「著者(author)版」なのかわかるようになっていきましたので、リポジトリを見られる際にはその点にも注意していただければと思います。あとはご自分のHPなどで論文を公開されたりとか、研究者間で自分の論文を読んでほしい時には、かつては雑誌の別刷りを送り合っていたのが、今はURLを書いて示すという形に変わって

きているとかいう話を聞きますが、その点はいかがでしょう。

学:印刷物が主流だった時代は、論文の別刷りが正式の資料でした。研究業績として別刷りを求められることもよくありました。それが今は大分変わってきたような気がします。研究者が論文をインターネットで公開するようになってきたのも、その方が早く多くの人に見てもらえるので、問い合わせや引用が増えるという波及効果も期待できるからでしょう。個人が情報を発信し公開する流れはますます加速していくと思います。

図:収集から発信まで、電子化による影響は大きいですね。それでは、大学として、本学の先生方の教育研究成果を公開することについてのご意見や、機関リポジトリに対するお考えなど、何かないでしょうか。

学:法人化に向けた制度設計の中で、教育や研究などの活動情報は全面的に公開しようという議論をしてきました。大学の教員は教育者であると同時に研究者でもあるので、教育と研究の両面で社会からの負託に応える責任があります。大学の大切な使命の一つは教育研究成果の社会還元ですが、教員一人ひとりが社会に目を向け、社会も教員の活躍に関心を持つ、そのような意識を高めるためにも教育研究成果の公開は大切だと考えています。



(インタビュー2011年2月8日)

大学教員はもともと研究者でもあるので、研究成果を発表することに抵抗はありません。研究成果が目ざれば研究意欲が高まりますし、新たなアイデアも湧いてきます。さらに科研費などの外部資金が獲得できれば研究はますます加速して新たな成果が生まれます。そのような研究の自己増殖的な循環をサポートする仕組みの一つが機関リポジトリだと思います。教員一人ひとりが教育研究成果を公開することで、大学全体が社会から評価され、それが刺激となって教育研究活動が活性化し、そのような正の循環を作っていきたいですね。個人で成果を公開するよりも機関リポジトリにも登録する方が、検索しやすく注目されやすいといった利点があれば、どんどん活用されるようになると思います。

図:そうですね。そういうどんどん出してもらい流れを私たちがまだ作れていないのが課題です。それでは、市大生にはどんな情報収集や情報活用ができるような人物になってほしいと思われませんか。大学として、社会に出て行く前に身につけてほしいこと、と言いますか。

学:先ほども触れましたが、世の中には間違った情報や品質の悪い情報が氾濫しているので、そのことを常に意識して注意深く情報を見分ける必要があります。世界中がつながった巨大なデータベースでもあるインターネットから必要なものを探し出す能力・技術と、それを正しく評価できる知識・意識を持つ必要があります。それは言い換えれば教養を身につけることだと思います。最終的には自己責任で判断するわけですから、よりどころは自分が今までに得た知識と経験を基準にするしかありません。その基準が作れるかは、人生の中で信頼できるものにどれだけ出会って、それを自分のものになっているか、ですよ。では信頼できるものは何か、古典的な言い方になりますけれど、やはり書籍と人なのでしょう。本で得た知識と人間関係で学んだ経験を参考にして、インターネット上の情報が信用できるか判断しているの

でしょう。情報を発信するの人もですから、インターネットの向こう側にいる人とうまく付き合うことがこれからの時代に求められるので、過信せず拒絶もしない適度な距離感を身につけて欲しいですね。

図:電子の世界と実世界をうまく使い分けて、その距離感を知っていく4年間…。そういうベースがきちんできていれば、今様々な大学で話題になっている学位論文のコピー&ペーストという問題も、クリアになっていくのでしょうか。

学:そういうモラルの部分は、本来教育の中で先生から学生に自然と伝わるものだと思います。要するに、倫理観や価値観は先生の考え方や研究姿勢から学生に受け継がれていくものなのでしょ。

図:学生だけでなく、私たちにしても電子化が進む現代は一緒に経験して成長しているところがあるので、みんな一緒に考えていかなきゃいけないところではありますよね。では、最後に本学の図書館に期待されることなど何かありましたらお願いします。

学:これからの大学図書館は、古い時代の大学図書館とは機能的に求められるものが違ってくると考えています。本や資料を収集し情報提供するサービスだけでなく、教育研究機能を本格的に導入する時代が来るだろうというイメージを持っています。図書館の中に研究室があり、そこで教員が研究し学生を教育するようになると、図書館は人が育ち新たな研究成果やサービスが生み出される場所になります。国立情報学研究所が電子図書館を作りつつ研究開発機能を持っている、これが一つの図書館モデルだと思います。本学で新しい大学図書館像を作る実験ができればと考えています。

図:すごい未来像ですね。わくわくします。私たちが引き続き基本的サービスの充実に加え、教育機能の強化に向けて頑張ります！

インタビュー② 赤星附属図書館長

図書館担当(以下「図」):研究や教育をされる時、学術情報の収集や、研究者同士の交流、コミュニケーションの取り方など、電子化が進んで何か変わったことはないですか。ご自身の意識の変化などありましたらお聞かせください。

附属図書館長(以下「館」):基本的には印刷媒体による情報収集というのは、当然しています。でも確かに電子媒体による情報というのは増えてきていますので、利用しています。ただ、電子媒体のものは大量に情報が入りますからね。その取捨選択が大変。

図:今までは集めるのに時間がかかったけれど、今は選ぶのに時間がかかる。

館:そういうことですね。しかし電子のものではできない、現地でのインタビューや、現地でしか入手できない情報収集等、フィールドワークっていうのは依然として大切にしたいですね。やっぱり電子だと限界があります。

図:フィールドワークされたその調査情報というのは、研究者内でどうやって共有されるんですか。

館:それは論文の形にして共有していますね。

図:それでは、先生がよく使われるデータベースは何ですか？紹介していただけないでしょうか。

館:外国研究はアメリカですから、よく使っていたのが、UMI(注1)と、ERIC(注2)です。ERICはフリーのデータベースなので、もちろんここでも使えます。あとはオンラインの記事購読ですね。それと、うちに入っているProQuest。国内の文献ではCiNiiもよく利

用しますよ。

図:CiNiiで本文を読む時、機関リポジトリという表示が増えてきたと思うのですが、直接雑誌へのリンクと比べて、機関リポジトリの本文を利用することの抵抗はないですか？

館:そんなに気にはなりませんね。中身が読めればいい。CiNiiで書誌情報しか出てこない時、複写依頼はもどかしい感じがしますから、基本的には電子化の方がいいんじゃないですかね。

図:そうですね。ちょっとでも本文がインターネットで公開されるものが多くなればいいということで大学などが機関リポジトリを運用している訳ですが、機関リポジトリへ論文を登録されることについてはどのようにお考えですか。

館:リポジトリは専門分野の学会誌等では掲載していないような、関連する分野の論文なんかも登録されているんですよ。そういう論文を拾うことができるんですよ。

図:そうですね。それが魅力の一つだと思います。

館:もともと論文っていうのは、学会誌だとか紀要だとかの冊子の形として公開しており、公開はしているんです。それを電子化すると、より多くの方がより早くより多くの文献に接することができるというメリットがありますよね。特に、私達からすると、研究というのは分かっていることはする必要はないんです。何かする時には必ず先行研究、レビューしなければならぬ。そういう時、電子化されていると早くチェックできますからね、便利なんです。そういうメリットがあると同時に、逆に言うならば、電子化されている方がより社会の厳しい目にさらされるっていうことも事実でしょうね。だからそういうことを意識した厳しい姿勢、倫理を含めた姿勢が必要とされるんじゃないかな。

注1 UMI:University Microfilms International 社が作成するアメリカの大学が受理した全ての米国学位論文(1961年～)のデータベース
注2 ERIC:Educational Resources Information Center 作成の教育学関係のデータベース

図: 先行研究をチェックする時に、皆がどんどん早く最新の研究をインターネットで公開していないと意味がないですよね。

館: 特に理系の分野なんかそうじゃないんですか。

図: 分野によって差がありますよね。機関リポジトリへの登録も、学会側の許諾が下りない事もあります。

館: 学会誌の場合、著作権に関する規定があります。また、市販されるものもありますからね。だから登録する時はそういうことの確認を気をつけなければならないっていうことはありますね。

図: はい。でもそれを先生方に確認していただくのは負担が大きいです。図書館が代行して行っています。

館: そう。研究者側が改めて手間をかけて登録しようっていうのは意識が低いかもしれないですね。載せたくないっていうのではなく、その手間が面倒だと思ってしまう。

図: でもそうやって公開すると、それが先行論文になって、それからまた多くの研究がされていく訳ですからね。

館: そうですよ、それはやっぱり研究のステップですからね。これからは図書館の基本的な役割として、論文を機関リポジトリに登録するというのも含まれてくるのでしょね。最終的には各研究者の判断に任せるけど、働きかけは図書館から行うという。

図: そうですね。全国の機関(図書館)が頑張れば、インターネット上に有益な情報が増えますから、それがやがて本学の教員・学生にも還元されるようにという良いサイクルを目指しています。

その他、館長のお立場で、図書館に期待することや力を入れていきたいことなど、聞かせていただけますか。

館: 大規模な総合大学のまねを無理にする必要はなく、本学の特長を活かしたような取り組みをしていくということでしょうね。電子的なサービスの充実と共に、場所や物の充実は依然として重



(インタビュー2011年2月8日)

要で、本学特有の資料構成、個人単位・グループ単位でやることに対応した学習の場、あとはレファレンスサービス、基本的にはこの3つを図書館は充実していくといいんじゃないですか。図書館でないといけない事があるから行くっていうことですよ。図書館を使わないもったいない。あとは、学生の学習(教育)に積極的に関わっていくのも必要でしょうね。「いちだい知のトライアスロン」という事業は、そのための一つの事業なんですよ。これで図書館も授業に関わっていきますからね。

図: 重要なポイントを再確認できました。当館が本学学生・教員にとって「図書館でないといけない事がある」という魅力を持ち続けられるよう、引き続き頑張ります！

インタビュー③ 服部先生(芸術学部教授)

図書館担当(以下「図」):

せきしつかんぼくのこしゅう

本学のリポジトリで、服部先生の論文「正倉院・赤漆欄木胡牀と西方のイメージ」(<http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/5054>)が、2010年の年間ダウンロード数最多論文でした。また、上位50内に服部先生の論文が5件ありました。

服部先生(以下「服」): お話をお聞きし、驚きました。関心を持たれていることが嬉しいです。

図: この論文について簡単に教えていただけますか。

服: この論文は国内外の多数の研究分担者との共同研究『シルクロード』科研(注3)の研究成果の一端です。電子化を前提としてまとめており、リポジトリ向きです。題目の「赤漆欄木胡牀」は、正倉院宝物の一つで、日本で唯一の国宝に指定され御椅子とよばれる椅子ですが、実際には天皇、高僧が使った玉座であり、世界的にも記録と実物が残る稀少な品です。この御椅子は、今日の椅子のように足を垂らした座姿勢の「カタ」ではなく、正座やあぐらをかく座姿勢をとるものです。椅子の背もたれ部分には錦をかけ、肘当てならびに網代の座面など、気候が熱い地域での利用も配慮した「カタチ」となっています。

図: たしかに、現代のものよりかなり横幅が広く、過ごしやすそうですね。

服: 「正倉院の「赤漆欄木胡牀」は中国製のものだ」という意見を中国の研究者からいただいたのですが、私はこれが日本製、それも皇室御用達の職人の手で、当時最高の材料と技術を使って作られたものと考えています。確かに伝来としては、中国に同様の「縄床」とよぶモノが敦煌莫高窟の壁画の現地調査で確認されていますが、私は御椅子の淵源が中国以西の中央アジアにその原形があったのではないかと考えています。詳しくは論文を読んで

ください。

図: それでは、この論文を執筆されたきっかけと、現在の研究について教えてください。

服: この研究のアイデアは、教育の必要性から始まりました。コンピュータメーカーで多数の商品開発をしてきた経験から、効率的なモノづくり以上に、高度なモノづくりとは何かということをお伝えしたい思いがありました。立体造形2年生のデザイン実習は、基本の素材(土、繊維、金属)をつかう手作りの課題です。3年前期で椅子の「座のカタとカタチ」の実習制作を行っています。この課題の期間中に正倉院や他の玉座を解説し、あわせて資料館に収集した有名な名作椅子を直接体感させます。学生はそれを計測し、最終的には椅子をデザインして制作します。学生は、最高品質のものを見る、ふれる機会が少ないので、最高の技能と技術、素材で作られたものを学生時代のうちに知って欲しいという思いからこの課題が始まったのです。実際に私の玉座の研究は、正倉院事務所調査だけでなく、大英博物館や故宫博物院などの調査でエジプトや西アジアの王朝家具、清の皇帝の使った玉座から古代技術がローテクでは無いことを確認できました。「玉座のカタとカタチ」の研究は、博士論文にまとめました。そして正倉院の胡牀の復元計画をすすめていたのですが、助成金が獲得できずにいるうちに鍛金部品の毛彫りができる人間国宝の方が亡くなられてしまった。現代の技術では人の美意識の介入部分の再現が困難です…。明後日からタラマカン砂漠で石窟寺院の壁画調査に行きます。壁画には様々な古代の生活光景が描かれ面白いです。写真見せてあげよう(笑)。

図: リポジトリに登録された論文はどのような人に読んでほしいと思われますか?

服: 基本的には、関心をもたれた方全てに解放されるべきですが、自分の研究している内容は、未開拓だから関心を寄せられる

注3 科学研究費『シルクロード東部地域における貿易と文化交流の諸相』平成17～20年(研究代表:大阪大学・森安教授)

のかな。玉座の研究をする人が極めて少ないのはたしかなので、これからもどんどん文章にしていきたいと思います。

問: 今後のリポジトリについてご意見がありましたらお願いします。

服: 海外からどれくらい読まれているのかわかりますか？

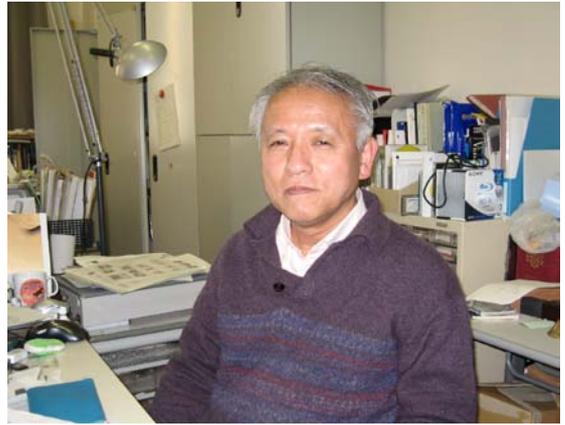
問: 閲覧直前のサイトはログでわかるのですが、この論文の先月、今月分を見ると、yahoo.co.jp と google.co.jp からのアクセスが多かったです。ただ、アクセス元が海外であるかはわかりません。

服: リポジトリは、現在の特許のようにいつ誰が一番に発表したのか明記することと、英語で発信していくことが益々重要です。「公開＝即コピー可能な状態」ということになると、その論文の流用・盗用の可能性も出てきてしまうので、リポジトリで公開する PDF にはコピーガードが不可欠だと思います。

問: そうですね。私たちもその点については配慮をしています。リポジトリへ登録する際には出版年月日は必ず入力するようにしています。会議発表論文などの場合は会議の日時も入れることができます。PDF にはコピー＆ペーストができないようにセキュリティをかけていますので、ご安心ください。

服: 要望は、リポジトリに入っている論文も OPAC で検索できるようにならないかな。「検索にヒットしない＝ない」と確信しますから。

問: 残念ながら、図書館システムとリポジトリシステムは別個のものなので、現在のところ難しいです。ただ、将来的にそうになったら本当に便利になりますね。



(インタビュー2011年2月9日)

大学の前はコンピュータメーカーの研究所で最先端の商品開発を猛烈にされていたという服部先生。大学では、誰もやっていないこと・魅力的なこと・自身が納得できることをしよう、といつも心掛けておられるとのことでした。
貴重なお時間をいただき、ありがとうございました！

2010年 年間ダウンロード数 TOP10

年間の総ダウンロード数は13,649件でした。

論文名	ダウンロード数
正倉院・赤漆欄木胡牀と西方のイメージ	532
チベット仏画制作センターにおける伝統技法用法と継承に関する研究	310
ソーシャル・キャピタルの形成と多様な市民社会：地縁型 vs. 自律型市民活動の都道府県別パネル分析	252
複数移動ロボットの協同作業と情報共有のための空間分割光通信システムの開発	195
第一次世界大戦期広島県における工場化の実態：広島県統計書の諸工場欄のデータベース化による分析	177
「天人女房」と世界の類話	176
ERP 導入と組織内調整プロセスの関係性	169
地中海文化としてのフランス・ルネサンス：ロンサールにおける死と再生の神話	155
空間光通信を用いた複数移動ロボットの共同作業のための相対的な作業空間地図の作成	146
地域コミュニティの再興に関する考察：日本におけるソーシャルキャピタルを巡る議論を基にして	134

■ 以下 50 件までを公開しています【学内限定】

→URL <http://www.hiroshima-cu.ac.jp/lib/private/dlstatisticof2010.pdf>

■ HARP URL <http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/20>

附属図書館ホームページからもアクセスできます。【トップ→機関リポジトリ→HARP 広島県大学共同リポジトリ】

HARP で論文を公開しませんか？

論文、研究成果報告書、会議発表資料など、教育研究成果物全てが登録の対象になります。お心当たりの成果物がありましたら、著作権の確認等は担当が行いますので、お気軽にご連絡ください。お待ちしております！

附属図書館リポジトリ担当： tosho-repo@lib.hiroshima-cu.ac.jp

編集後記

HARP 公開から約3年が経とうとしています。こうして 1,000 件を超えるコンテンツを登録・公開することができて、担当として喜びもひとしおです。これらは先生方が時間をかけて生み出されてきた宝の数だと思っています。先生方の宝が、次の研究につながり、さらには他の研究にも活かされ発展していくことを祈って、私たちもリポジトリの充実に努めてまいります。今後ともご協力をよろしくお願いたします。

2011年2月25日発行
 広島市立大学附属図書館
 広島市安佐南区大塚東三丁目4番1号
 TEL : (082) 830-1508
 FAX : (082) 830-1659
 E-mail tosho@lib.hiroshima-cu.ac.jp
<http://www2.lib.hiroshima-cu.ac.jp>